

入學前期の幼兒の教育

東京女子高等師範學校附屬小學校

淺 黃 俊 次 郎

1、小學校としての希望？

人間の身體も心意も生活も、共にその發達は連続的なものであります。幼兒にしても兒童にしてもその發達に飛躍はなく、同様にあくまでも連続的なものであります。いま入學前期にある幼兒が、近く小學校教育を受けなければならないからといふので、何か速効的な準備を課せられることは、發達の自然に合致しないことになるのであります。幸に一般の小學校にはその學區が決められてゐる爲に、幼兒が小學校へ入學するのに競争する必要がないのであります。これは誠に結構なことでありませう。それで不自然なる入學準備教育といふものは、更に要らないのであります。幼稚園教育は幼稚園教育の本旨を以つてたゞ一筋に、十分餘裕を以つて幼兒の保育に當ることが出来るのであります。そして、さうあらねばならないのであります。

幼兒の教育を引繼ぐ小學校として、何を幼稚園に要求するか？この問題に對しては、私の教育觀から致しますと、その要求するこゝ自體が全然間違つてゐることを考へるのであります。根本的に觀まして、中學教育が小學校教育に要求し、小學校教育が幼稚園教育に要求するといふことは、間違つてゐるのであります。しかし、幼兒の教育といふ點からならば、今日の幼稚園教育に對してもつゝ要求したいことはあらうことを考へます。小學校に於きましても、兒童の教育といふ點からは、まだまだ今日の小學校教育に對して要望されなければならないのであります。この根本觀念に於きまして、適正妥當な幼兒

教育といふものから幼稚園教育に要望したいことはあるにしても、入學前期にある幼児の教育に對して、小學校教育から特別に要求することは無いのであります。

2、入學兒童を迎へる小學校の態度

今日の小學校教育は可なりに進んでまゐつてをります。わけでも低學年教育の改善進歩は實に著しきものがあります。その最も著しい改善の傾向は、小學校教育の方から幼稚園教育に接近し、家庭教育に接近しつゝあるといふことでありまゝす。小學校教育といふものを何か鑄型の如くに見て、之に入學兒童をはめ込まうとすれば、はめ込むやうに出來た子供でなければ困る言つて、入學前期にある幼児の教育に對して大いに註文もし苦情も訴へるでせうが、今日の小學校の學低年教育は、教育の鑄型に子供をはめ込まうとはしないで、幼稚園及び家庭から預つた兒童の身體、心意、生活の状態に鑑みて、兒童に教育を適合させるのであります。

教育といふものは、何處の如何なる教育でもかくあるべきものゝ私は考へてゐます。即ち、「教育に兒童を」であつてはいけない、「兒童に、教育を」でなければならぬのであります。まことの幼稚園から入學したまのやうな兒童に對しても、まごの家庭から入學したまのやうな兒童に對しても、入學したその兒童の状態に適合した教育を以つて、それらの兒童の身體、心意、生活の進歩發達を圖るべきなのであります。私共はこの態度を以つて入學兒童を迎へます。我が東京女子高等師範學校附屬小學校はこの態度を堅持してゐます。大方の一般小學校も亦、その低學年教育の改善から、以上のやうな教育的態度を以つて入學兒童を迎へ、且また教育するやうになつて來てゐるのであります。

3、幼稚園は幼稚園の教育を

幼稚園教育に當つてをられる皆様が、やがて小學校に入學する幼児に對して、小學校教育を受けるに都合のよい準備的

な教育を施さうとなさるのは、小學校にしても幼児にしても、その情に對して感謝しなければならぬわけでありませう。しかし、小學校教育としては、前にも申した如く、むしろ幼稚園教育に接近することを努めてゐるのでありまして、入學前期にある幼児をば小學校教育のために特に教育して戴かうことは考へないのであります。またさう考へるのは誤なのであります。

幼稚園はあくまでも幼稚園の教育に終始されるべきであります。あくまでも幼児の身體、心意、生活の發達の自然に適合する教育を施すべきであります。そして私に言はしめるならば、全然、小學校教育の爲るか、それを受ける兒童の將來の便宜の爲るかを考慮する必要はないと申したのであります。若し幼稚園に於て、入學前期にある幼児に對して小學校の教育を受ける準備を施さない爲に、入學後不幸を受けるものとすれば、それは小學校教育の大なる缺陷の爲なのであります。

生れつき非常に腕白で粗暴な子供があつて、その子供が小學校に入つたら嗚かし小學校も困るであらうと心配するところから、むりに制へつけてその子の活動性を摘取つてしまひ、その心性をゆがませるやうなことがあつては大變であります。また、自分の幼稚園から入學後の物知り優等生を出して誇りたい爲に、むりに尋常一年生の教材を入學前に詰込んでおくといふやうなことは、更々小學校としては有難いとは思はないばかりでなく、眞の教育を施すのにむしろ非常に困るのであります。

幼稚園教育は「子供の遊び」を善導するものであると私は観てをりますが、「よく遊ばせる」といふことはなかく苦心を要し骨の折れることであります。遊ぶために遊ぶその「遊び」が幼児の生活の主體で、よく遊ぶうちに身體・心意・生活の擴充發展が齎らされるのであります。よく遊ぶ結果として自然に學ばれることも多くなるのですが、この幼児の生活が、小

學校に入學したから急に「學び」だけの生活に一變するのではないのであります。だからこそ我々の卒先提唱する尋一の新教育は、兒童の生活の發達に着目して、幼稚園時代の「遊びを本體とする生活」から「學びだけの生活」へ急轉回させるべきではなく、遊ぶ爲に遊ぶ幼兒の生活から、學ぶためによく遊ぶ生活の指導を實施するのであります。

かう申してまゐります。如何にも幼稚園は幼稚園の教育に終始して不安はないものご考へられるであらませう。全くその通りであります。しかし乍ら幼稚園としては、何かしら入學前期の幼兒に對して準備的な指導を與へないご安心の出來ない節があるかも知れません。若しさうだますれば、それは小學校教育にまだ信賴するに足らぬ部分があるわけであります。尤も、小學校の教育がごこも皆改善されてゐるわけではなく、ごの尋一教師も進んだ考へを持つてゐるごは申されないのであります。大都市の小學校でも設備の貧弱や兒童數の過多のために、不自然にして無理な舊式教育をしてゐるごころもあるのですから、その點から考へますご未だ安心の出來ないのも無理もなく、隨つて何かしら小學校教育のために、入學前期の幼兒に對して準備的な指導を施さなくてはご考へられる次第であらうご思ふのであります。

4. 文字を教へておくのはどうか

幼稚園で文字を教へるものだから、幼稚園に入らなかつた兒童ご一所に教育するのに甚だ困るご言つて、入學前に幼稚園で文字を教へぬやうに申込んだ所もありますごか。また一字一字順々に教へようごするが、兒童が知つてゐるので教へるごが出來ず、教授が出來なくて困つてゐる尋一の先生もあるさうです。しかしこれらは何れも「兒童に教育を」施すのではなく、「教育に兒童を」はめ込まうごする間違つた考へであります。また、最近卷一の讀本が改正されて、その第一課からして「サイタ サイタ サクラ ガ サイタ」ごいふ文章になつてゐる爲に、ごうしても入學前に文字を是非教へておかなければなるまいご、一圖に思ひ込む人もあるらしいのでありますが、これも思ひ誤りであります。

入學準備のために無理に文字を教へ込む必要は少しもありません。しかし、自然に覺えるものを無理に覺えさせぬやうにする必要もないのであります。生活の自然のうちで、遊びの自然のうちから、幼児が文字に親み文字に興味を持たば、いつかひきりずに子供は文字を覺えるものであります。殊に都會地の子供にまつては、自然、文字は生活の環境をなしてゐるのであります。それを無理に覺えさせまいとし或は覺えてはならぬを止めるのは間違つてゐるのであります。小學校も亦、この幼児の生活的な自然的文字修得をば充分に認めて、兒童の状態に應じて教育すべきなのであります。

文字は違ひますが、數に關する教育で幼児に算術を教へ込むことも注意すべきであります。事實に就ての眞の數量觀念はまるでないのに、徒らに形式算風の空虚なものを言葉だけで覺え込ませる事などは、入學後の算術教育に大變わざはひするのであります。大體に於て、學科的な知識を入學準備として教へ込んでおくさいふ事は無用なのであります。

5、學習態度を養つておくことは？

四月に入學するのであるから、そろそろ學科を勉強する態度を持たせておかなければなるまいなごも考へるのは、あまりに老婆心であります。遊ぶごころばかりさせないで、少しは學ぶごころも準備として練習させておかうなごも考へるのも無用なのであります。今日、幼稚園教育に對する識者の非難があるごしますれば、それは一部の幼稚園が小學校教育の眞似をして、型にはめ込む訓育をしたり、物事を教へ込む教授をするものゝあるさいふ點ではないかご考へるのであります。あくまでも「よく遊ぶごころの生活に對して指導するさいふごころは、事實として内容の充分に伴つた觀念を得させるごころになつてゐるのであります。よく遊ぶごころによつて數量觀念も得させるごころが出来るし、言葉や文字も自然に覺えさせるごころが出来るのであります。

學習態度ごか學校の規律的生活なきは、小學校で段々に馴致すべきごころであります。故に今日の尋一教育は、入學ご共

にがらりき兒童の生活態度を急變させないやうに、幼稚園風に學校生活をさせ、家庭風に導く傾向になつてゐるのであります。しかし、幼兒の入學するその小學校の教育が、未だに舊式で固陋でありますれば、入學前期に几帳面な規律的生活を準備して習慣づけて置いた方が、却つてその子の爲に幸であるかもわかりません。

幼兒が小學校に入學すると同時に、まるで子供の生活態度が急激に變つてしまふこゝがあれば、それは不自然なる強制的教育が行はれた證據であります。幼稚園時代の生活や家庭生活によく連續を保ちつゝ、自然的に生活を指導して發展させる教育が、よき教育法なのであります。家庭教育で及ばない所や間違はれた所を、幼稚園や小學校の教育で矯正補育しなければなりません。子供の身體・心意・生活の指導を合自然的に行ふこゝいふならば、入學したからこゝて家庭や幼稚園の生活状態を離れた生活を急にさせるこゝとはいけないのであります。

6. 一般的な子供を要求するか

幼稚園によつても色々その訓育法に特色があつて、まるで小學校風の舊式な様方をする所から、入學兒童が如何にも「教へを受ける」こゝいふ態度に出來上つてゐるのに驚くこゝがあります。また家庭によつてもさういふのがありまして、幼兒にはかに生徒らしく固まつて入學するのがあります。「學校に入つたらしつかりお勉強するんですよ」とか、「しつかり先生のおつしやるこゝを聞くんですよ」とか、「おきなしくして先生に叱られないやうに」とか、小學校入學期に急激に然も強大に押しつけるのであります。故に兒童は甚だ消極的になつて、自分から殆んき發動せず、たゞ先生の教へを受取るこゝだけに専念するこゝになるのであります。實に氣の毒も可哀想であります。さういふ出來上つた態度の兒童は、少なくも私共の尋一教育には困るのであります。

子供として自然な發達をした兒童が望ましいのであります。自發活動性に富んだ子供が何よりも望ましいのであります。

す。自分から興味を以つて働き出し考へ出す児童が望ましいのであります。それでは尋一の教師が困るだらうなき、同情なさる必要はないのであります。學校さいふ所は机を腰掛に釘付のやうになつて、教へるこころを受取ればそれでよい所であるかのやうに思ひ込ませるのは、最もいけないこころであります。

共同性を持ち、他人を仲よく生活の出来る子供は、これ又望ましいこころであります。たしかに今日の幼稚園をふんだ児童は社會性を養はれてゐます。小學校も児童の社會性の啓培を目指して教育しますが、この社會性のある活動さいふものは、説明や訓諭で養はれたるものではなく、やはり共同生活をさせるこころによつて養ふこころが出来るのであります。進んで遊戯を共同する子供、進んで作業を共同する子供——さうした興味と意欲を持たせられてゐる子供は、誠に望ましいのであります。

一般の小學校からしますと、大體四十人以上六七十人の學級にして指導しますが、入學當時の児童の指導で困るこころは、例へば「皆さん」をいつて六七十人全體に對して教師が指示する場合、子供はこの「皆さん」の中に自分が含められてゐる、自分のこころであるさいふ意識が甚だ薄いさいふこころであります。教師が全體に對して「皆さん」式に教示し指示しようとしても、子供は他人のこころのやうに思つて、めいめいが自分のこころでないかの如くに馬耳東風であります。そして必ず改めて自分の事であるこころをめいめいが教師に念を押すのであります。「皆さん」を言はれたならば全體の事であり、そして必ず自分の事であるこころを強く意識するさいふこころは、これ即ち社會性のある所以で、かくの如き一寸こころではあるが「皆さん意識」を相當に持つて入學するさいふこころは、尋一初期の指導上大變都合なのであります。しかしこの點に關して、年一々幼稚園教育を受けた入學児童に其の進歩を私共は見得るのであります。尙入學前期にある幼児に對して、この方面の指導をして戴きたいやうに考へるのであります。